

まちの記憶を描き、眺め、語り継ぐ社会的デザイン実践

-回る往復書簡・ラウンドアバウトレターズを用いて-

Societal design which draws, view and hand down the memory of town

-Making use of Roundabout Letters as Round-trip letter which spin -

横溝賢¹, 鈴木葵¹, 宮田義郎², 原田泰³

¹Ken Yokomizo, ¹Aoi Suzuki, ²Yoshiro Miyata, ³Yasushi Harada

¹札幌市立大学, ²中京大学, ³株式会社デザインコンパス

¹Sapporo City University, ²Chukyo University, ³Design Compass Co.,Ltd

k.yokomizo@scu.ac.jp

概要

過疎化が進む地域では、充実した医療や介護を求めて経済圏に転出する高齢者が増えている。高齢者の転出が進むと、その土地の記憶が消え、いずれは忘れ去られる場所になってしまう。そう考えた筆者らは、北海道浜頓別町に住む共著者・鈴木の祖父の生活世界を描き、往復書簡で祖父を含む道内外の知人に伝達・交流することを試みた。その結果、関係者らは相手の生活世界を受け容れることから、次第に自己を開示する生成的なコミュニケーションをおこなうようになった。

キーワード: 往復書簡, 生活世界, 二人称的アプローチ, コミュニケーションデザイン

1. はじめに

北海道の経済文化の中心地札幌市は道内からの転入者が増加の一途をたどっている。丸山によると、大学進学や就職に伴う若年層の移住に加え、充実した医療・介護などを求める高齢者も移動しているとみられる¹⁾。道北・宗谷地方東部にある、人口約3500人の小さなまち・浜頓別町（以下、浜頓別）に住む共著者・鈴木の祖父（93歳）も地方から札幌への転出を計画する高齢者の一人である。鈴木は祖父（以下、祖父）は、かつてこのまちの郵便局員として働いていた。札幌出身の鈴木にとって、大自然の魅力が詰まった浜頓別は憩いの場所であったという。しかし祖父のように高齢者1人が都市に移住するたびに、その人が見ていた地域の記憶もその土地から消滅してしまう。高齢者の転出が進めばいずれ地域の記憶は途絶え、どんなにまちに魅力があっても「忘れ去られるまち」になってしまう。筆者らは忘れ去られないようにするためには、まちの記憶を個々人で抱え込まず、まちに関わる人、関わりを持たない人にもまちの記憶を語り継ぐ活動が必要ではないかと考えた。本研究では、札幌に住む鈴木が中継となっ

て、道内外の知人四者（鈴木は祖父／浜頓別にIターンのグラフィックデザイナーのK／神奈川在住の高校時代友人Y、東京在住の短大時代友人R）と手紙を使って間接的に浜頓別という祖父の生きる現場を描き出し、浜頓別と手紙に関わった人との間に記憶のつながりを形づくるコミュニケーション実践をおこなった。

2. 研究方法

2.1 「手紙」を使う意味

SNSが発達する現代において、あえて手紙を用いて往復書簡によるコミュニケーションを取ってみる。その試みには、手紙ならではの3つのメディア特性が絡んでいる。宮田穰は、手紙のメディア特性に①対象への想像力の必要性 ②表現の多様性による情報の質の豊かさ ③考える時間を生み出す余裕を挙げる²⁾。この3点を踏まえ、鈴木が現場で得た経験や記憶を、特定の相手に対し、より感情豊かに伝えるため、テキストデータでない手書き文字や、鈴木が描いたイラスト、撮影した写真を取り入れた手紙を送ることにした。

2.2 実践の動きかた

本研究では、きまに現場に出向いて歩いて見ることから現場の人びととの社会的なデザイン活動を形づくるランブリングデザイン運動³⁾をモデル（以下、ランブリング）に、手紙で他者と語る間接的なランブリングデザイン運動モデル（図1）を用いて実践を展開していく。

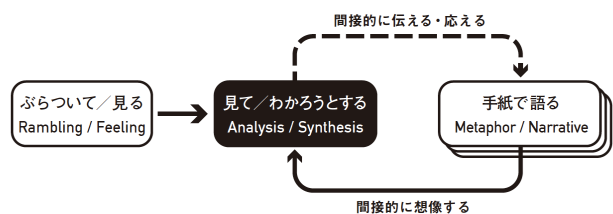


図1 往復書簡を取り入れた
間接的なランブリングデザイン運動モデル

3. 実践準備

実践の前に、ランブリングデザイン運動でのくぶらついで見る／見てわかろうとするのフェーズにあたる浜頓別町ランブリングを計3回行なった。1回目は祖父と漁港で釣り体験し、自然との共生をわかろうとした。2回目は、鮭釣りの現場に同行し、釣り中心で暮らす祖父の生きかたをわかろうとした。3回目では、町内の行き慣れた場所を改めて観察し、浜頓別に暮らす生き物たちをわかろうとした。現場での体験は全て省察的に描いて記録を残した(図2)。

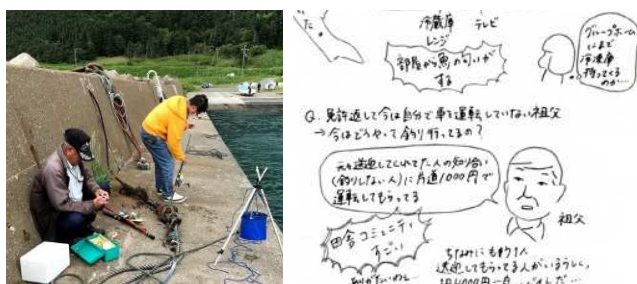


図2 祖父との釣りと活動の省察ノートの一部

4. 応答を促す往復書簡のデザイン

鈴木はランブリングでの発見をハガキに描いて祖父に3通送ったが返信がなかった。その原因のひとつは、ハガキが相手の応答を求めないコミュニケーション形式にあると考えた。そこで1章にて述べた道内外の知人・四者からの応答を促す仕組みとして、返信用ハガキと、ハガキに描いたモチーフの写真を同封して送付する方法に改善した(図3)。これにより、ハガキを送った相手から返信が返ってくるようになった。このような送り手が中継となって多様な人びとと間接的に手紙をやりとりすることから、まちの記憶を描き出す方法を、道路の環状交差点・ラウンドアバウトになぞらえて本稿ではラウンドアバウトレターズ(以下、RL)と呼ぶ。本研究ではこのRLを使って語り伝えることを通じて、浜頓別町での暮らしの記憶が前述した四者にどのように伝播したのかを分析する。

5. 実践

5.1 RLの枠組みづくり

本章では、RLを使ったコミュニケーションを分析する際の四者の位置付けについて概説する(図5)。

まず鈴木は祖父は「浜頓別町在住で鈴木に近い存在」である。当時93歳で、生まれも育ちも浜頓別町の生粋

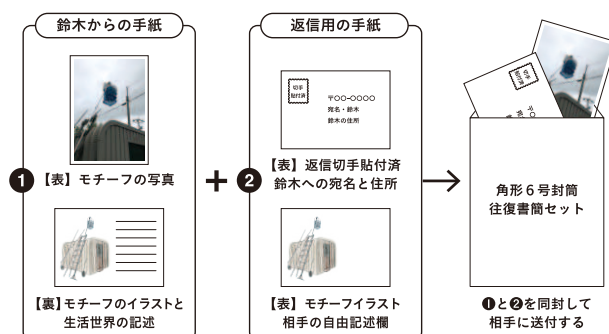


図3 相手の返信を促すRL実践の方法

の浜頓別町民である。現役の頃は、町内の下頓別郵便局で郵便局員として働いていた。祖父には実践準備の段階でハガキを送付していたが返信が来なかったため、RL実践を通じて祖父が返信をしてくれるようになるのか、またどのような返信が返ってくるのかを観察する。

次に、浜頓別町民・K氏は「鈴木とあまり接点はないものの、浜頓別町在住」である。K氏は浜頓別町に2020年春に東京から移住したばかりで、現在は東京在住時の会社に在籍したままリモートワークでデザインの仕事をしている。鈴木はRLにおいて言葉と絵、写真を好んで用いてやりとりをしようとしていた。鈴木同様言葉だけでなく絵や写真を含むデザインされた手紙で語りを紡ぐ相手としてK氏がいることで、より生活世界の物語を構成する情感的な情報(絵)と論理的な情報(言葉)の双方が描き出されるのではないかと考えた。

最後に、鈴木は友人Y氏とR氏はともに「浜頓別町のことをよく知らない」存在である。

友人Y氏は鈴木の高校時代からの友人で、札幌出身、現在は社会人として神奈川県で一人暮らしをしている。Y氏は浜頓別にゆかりがなく、今回の往復書簡を通じて浜頓別に初めて関わりを持つ。そこで、手紙のやりとりを通じ、Y氏が浜頓別との関わりや繋がりをどれだけ感じ取れたかどうかを観察する。

R氏は鈴木は短大時代からの友人で、函館出身である。現在は東京都で家族と暮らしながらデザイン会社で働いている。R氏には今回の実践では応答はしてもらわず、鈴木からの一方通行のやりとりでどれだけ浜頓別との繋がりをと感じ取れたかを観察する。

5.2 実践の展開

鈴木は、実践準備において祖父との3回のランブリングで印象に残った経験をイラストでハガキに描き、2021年4月から2021年11月末までの約8ヶ月間、7

通のイラストハガキを段階的に制作し（図 4）、四者と手紙のやりとりを実践した（図 5）。その間やりとりした手紙は全部で 46 通あり、鈴木からは町民 K 氏と友人 Y・R の両氏にそれぞれ 7 通、祖父に 6 通送付している。また、返信の総数は 19 通で、その内訳は祖父が 5 通、K 氏・Y 氏が各 7 通、R 氏が 0 通となっていた。R 氏とは返信無用の合意のもとやりとりをしたため 0 通となっている。全往復書簡の内容は付録 A を参照されたい。

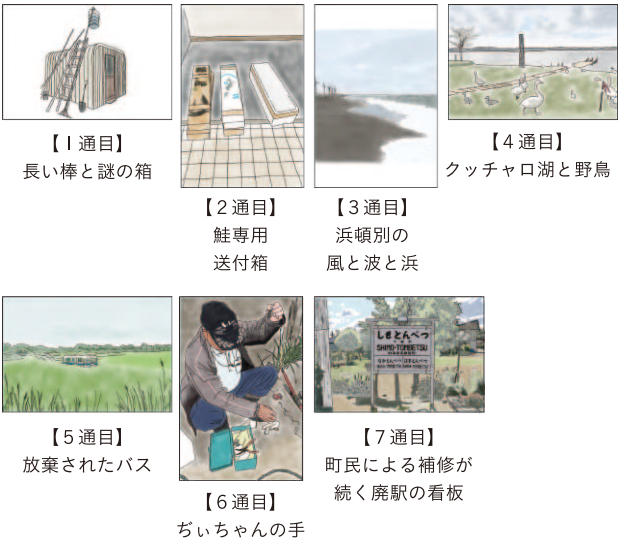


図 4 鈴木が描いた全 7 通の手紙のモチーフ

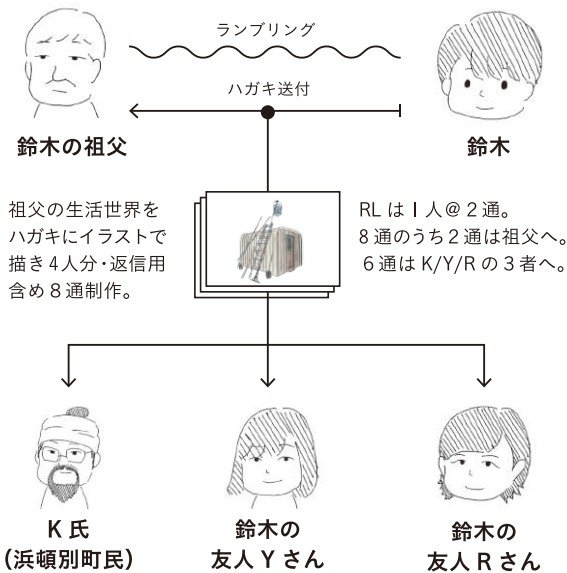


図 5 鈴木から手紙を送付する流れ・枠組み

6. コミュニケーションの分析

6.1 往復書簡遷移図による文脈分析

筆者らは一連の手紙のやりとりを時系列に並べた遷移図を元に、筆者と各対象者の手紙に書かれた文章を「私」「他者」「土地」「現場」「もの」「こと」の 6 つの

文脈要素（表 1）を用いて分解し、各人の手紙のやりとりを通した変化をわかろうとするためのコミュニケーション分析を行なった。分析データには鈴木と祖父、K 氏、Y 氏との往復書簡に記述された言葉をもちいた（付録 A）。その結果、祖父、K 氏、Y 氏、ともに、返信当初は「私」の頻度が少なかったが、往復書簡をやり取りするうちに、「私」に関連した「もの」「こと」「現場」を伝える文脈要素が増えていった。以下、鈴木と K 氏、祖父、Y 氏の順に、それぞれの往復書簡に含まれる文脈要素を分解し、RL に関わった個々人の変化を考察する。

表 1 手紙の文章における文脈要素とその定義

文脈要素	定義
私	私（書き手）に関する行動や感情の開示
他者	書き手以外の他者に関すること
土地	客観的な場に関する事実
現場	自分が営みを行う場所のあり様
もの	話題の鍵となる象徴的なもの
こと	事象や営みに関すること

6.2 鈴木のコミュニケーション

鈴木による RL 1 通目のハガキは、祖父の家の物置に立てかけられた長い棒と籠を見つけた時の「何これ？」という素朴な疑問を綴った内容である（図 6）。図 4 に示す鈴木が四者に送った 7 通の手紙は、祖父との浜頓別ランプリングで「私（鈴木）」が見つけた「現場」「もの」「こと」であるため、全通にわたって自己開示を基調としたコミュニケーションであった（図 7）。

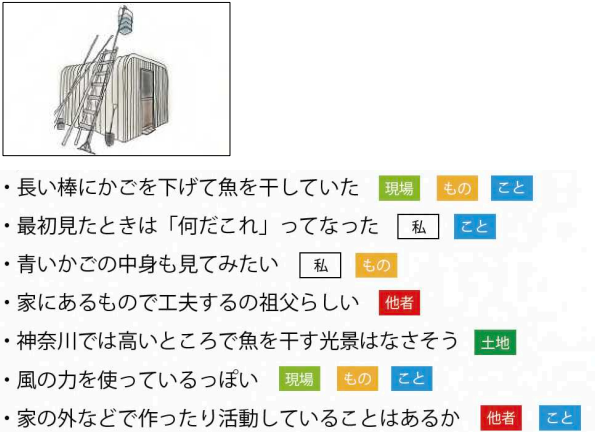


図 6 鈴木が四者に送った 1 通目のハガキと
四者に綴った文章に含まれる文脈要素

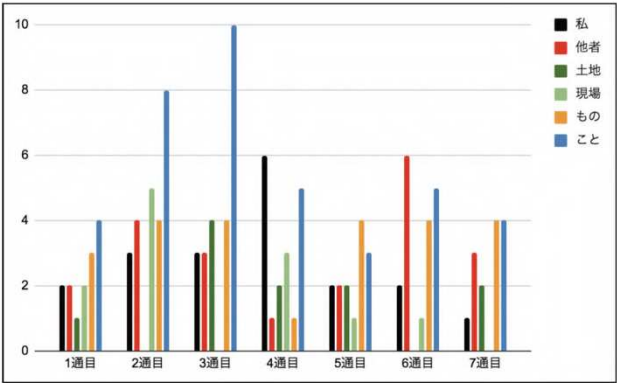


図7 鈴木の送付した各手紙の文脈要素の頻出数

6.3 K氏のコミュニケーション

四者の中で特に自己開示の変化が顕著だったK氏は1通目の返信では、鈴木の見つけた疑問（図6）に対しては「何でわざわざ屋根の上にまで伸ばしているのか」と応えている（図8）。K氏は鈴木の問題をそのまま反芻したのみで、ハガキのほとんどは、庭の木を伐採してくれた、チカラ君の生きかたに関するインタビュー内容であり、K氏の生きかたはほとんど語られていない。このように1通目の文脈要素の分析では「私（K氏）」以外の「他者」「こと」を含む内容が多かった。これに対し7通目の返信（図9）で含まれている文脈要素の数は大きく変化しており、「私」「現場」「こと」を含む内容が増えていた（図10、付録A）。



- 4/30
- 木を伐るチカラ君 × 伐られた北見（私）対談 [私] [他者] [こと]
 - 魚を干しているのは都会でもたまに見かける [土地] [私] [こと]
 - なぜわざわざ屋根の上にまで伸ばしているのか [他者] [こと]
 - 外の活動→庭の木を伐ってもら [現場] [私] [もの] [こと]
 - 畑に日当たりが良くなるように木を倒したい [現場] [私] [こと]
 - 木を伐ることは減多にできない [他者] [こと]
 - すごく高いところまで登って枝を落とす [他者] [こと]
 - 伐ったら薪になる [他者] [もの] [こと]
 - 手間隙かけたほうがいい [他者]
 - 子どもの頃から木登りが好き [他者]
 - 昔から木に慣れ親しんでいた [他者] [こと]
 - 木を伐ることが楽しい [他者]
 - 木を伐るのは生活のための一仕事 [他者] [こと]
 - こっちの人たちが外でやっていることは生きるために必要だからやっていること [現場] [他者] [こと]

図8 K氏の1通目の返信と各文章に含まれる文脈要素



- 11/4
- 下頓駅の手入れは高齢の町民が一人でやっていて、将来手入れする人はなくなるかも [土地] [他者] [こと]
 - 隣の銭湯は先月潰れたけど有志のボランティアですぐ再開、儲けはなし [土地] [他者] [もの] [こと]
 - ライフラインにも影響が出ている「過疎」の地に都会にはない暮らしを求めて移住した自分からしたら人が少ないのは魅力 [現場] [私] [こと]
 - 過疎のいいところたくさんある [現場] [私] [こと]
 - 東京では減多に会わなかったけど近所に友達がたくさん、毎日友達に会う、親世代とも友達 [現場] [私] [他者] [こと]
 - すぐ裏の山には熊が食べた鹿の骨が落ちている、いつでも動物園気分 [現場] [私] [もの] [こと]
 - 吹雪が酷いと町全域が停電に、蝋燭の灯りでご飯は逆に新鮮 [現場] [私] [こと]
 - 空気が綺麗なせいか鼻毛が飛び出なくなった [現場] [私] [こと]
 - 東京では不動産購入は諦めていたが、空き家がタダで庭付き一戸建て、家庭菜園ができるくらい庭が広い [現場] [私] [もの] [こと]
 - お店が遠いのでトイレ紙をストックするようになりあ、ない！がなくなった [現場] [私] [もの] [こと]
 - 朝は日の出と共に起床、日没と共に真っ暗に [現場] [私] [こと]
 - 東京ではまだ働いていたが22時ごろには就寝 [現場] [私] [こと]
 - 犬の散歩はノーリード、猫は放し飼いで散歩についてくる [現場] [こと]
 - 犬も猫も飼い主も幸せ [現場] [私]

図9 K氏の7通目の返信と各文章に含まれる文脈要素

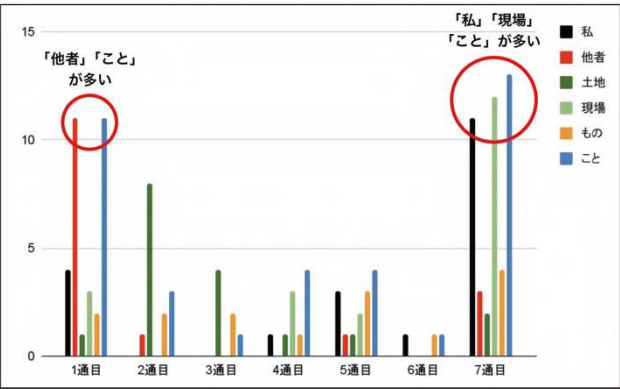


図10 K氏の送付した各手紙の文脈要素の頻出数

6.4 祖父のコミュニケーション

続いて祖父は、図11を見ると「土地」の文脈要素がどの手紙にも含まれていないのが特徴的である。また、一貫して「私（祖父）」の「こと」に関する文脈要素が多い。例えば、2通目の返信では全ての文章に「私（祖父）」の「こと」に関する文脈要素が含まれている（図11、12）。K氏と比較すると、鈴木との関係性が元より強いことから、全ての手紙を通して自身の営みや行為について直接的に開示していることが分かる。3通目までは鈴木の問題に自身の営みを開示して返答するのみであったが、5通目では草原の中のバス（図4）が40年という時を経て今なお放置されていることから、40年前から今に至るまでに現場であった町民による営み、

そして祖父が当時を回想して自身も「(いちご狩りに)何度か遊びに行ったことがある」という、かつてそこにあった過去の営みの記憶、祖父にとっての事実についても教えてくれるようになった(図11)。このようにして眠っていた祖父の「こと」の記憶が手繰り寄せられ、語られることによって、鈴木と祖父両者にとっての浜頓別の生活世界が再設定されたと推察する(付録A)。

10/15

・バスは宇曾丹の老人クラブの人たちが40年くらい前から15,16年老人クラブの資金集めにいちごを作って休憩室に使っていたもの

現場

他者

もの

こと

・過疎が進んで老人が減り手入れが出来なくなっている

現場

他者

こと

・一時はあの付近30アールほど使っていた

現場

こと

・祖父も何度か遊びに行ったことがある

私

こと

・1年中で一番楽しみにしていた鮎釣りも昨日で終わりにした、楽しかった

私

こと

・今年は大漁で計47匹釣った

私

こと



図11 祖父による2通目の返信内容と文脈要素

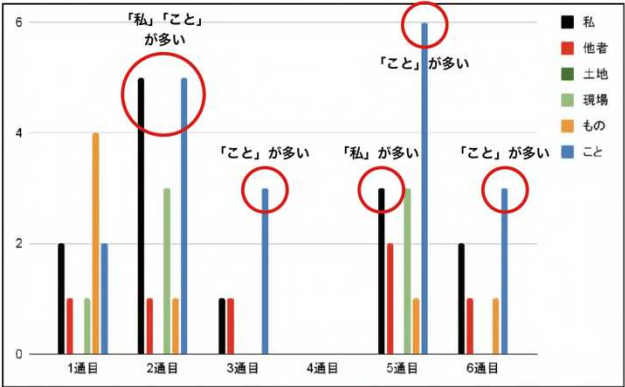


図12 祖父の送付した各手紙の文脈要素の頻出数

6.5 Y氏のコミュニケーション

Y氏の手紙には文脈要素の多いものとあまり多くないものが見られた。例えば、1通目の返信は各文章にそれぞれ1つの文脈要素しか含まれていない(付録A)。自らの生活世界を開示的に描き出すには、最低でも「私」「こと」の文脈要素が必要だと考えるが、その点を踏まえると、1通目の返信では自己開示があまりないことが分かる。2通目では「実家でも神奈川来てからも魚介類ほとんど送られてこない」「オシンコシンの滝とか自然を当たり前で中学の修学旅行で体験できたことが今思うと幸せだった」という文章、3通目では「(浜頓別の)風強いといえば電車でスプラッシュマウンテンしてきた」「前回滝の話をしたけど、先日同期と等々力の避暑地行ってきた」という文章において「私(Y氏)」が見

て感じている「こと(生活世界)」を開示する文脈要素と言える。またそこには個別具体的な「現場」や「他者」といった補足的な情報が付随していることが分かる(付録A)。Y氏は、鈴木の手紙に描かれた北海道最北端の浜頓別から連想して、修学旅行で訪れた北海道最東端の知床にあるオシンコシンの滝を回想し、後日訪れた等々力の避暑地の話、浜頓別の風の強さから連想して電車でスプラッシュマウンテンした出来事などを開示することを通じて、Y氏なりに二人称的⁴⁾ [佐伯, 2018/レディ, 2015]に浜頓別に思いを馳せ、遠隔にいる鈴木との相互的なコミュニケーションを取ろうとしていたことが推察される。また、鈴木が7通目に送った「廃駅になった下頓別駅の看板文字が風化しないように塗り足して補修する市民がいることを伝えるハガキ(図4)」の返信において、Y氏は下頓別駅跡の看板に対して「何もない場所にポツンと、でも堂々と立っているのがかっこいい」という感想を持ち、「自分も存在感のある人間になりたいと思う」と看板の様子を自分自身に投影して、その存在を意味付けしていた(図13)。これには、鈴木自身が徐々に、自分の見ている生活世界をより緻密に描くようになり、はじめの頃よりも生活世界の存在感がY氏にとってより想像しやすくリアリティをもって伝わった結果であると考えられる。また、Y氏の文脈要素の遷移を分析した結果、手紙ごとに文脈要素の多いものとそうでないものが見られた(図14)。

11/20

・何もない場所にポツンと、でも堂々と立っているのがかっこいい

土地

現場

私

もの

こと

・こだわりが見えて、「人の手で作られている」あたたかみを感じられる

もの

こと

素敵な看板だね

もの

こと

・自分も存在感のある人間になりたいと思う

私

・今はなんでもデジタルや機械で作れるからこそ、アナログな手法が、良さが際立つように見える

もの

こと

・なんかいつもとハガキの質違う、これも何か理由があるのか

もの

こと

・葉さんはどう思う?

他者



図13 Y氏による7通目の返信と文脈要素

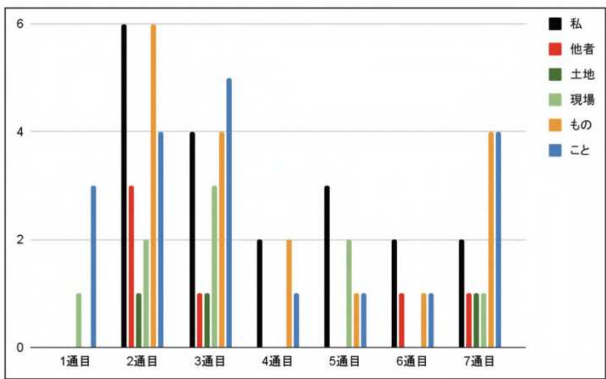


図14 Y氏の送付した各手紙の文脈要素の頻出数

Y氏の場合は、ハガキに描かれた情景を眺めたあと、日常の出来事にその情景が重なって見えた時にのみ、自らの心象を書き連ねていた（図14、付録A）。Y氏は、RLのやりとりを通じて二人称的に浜頓別に思いを馳せ、生活世界の変化を味わえるようになったと考えられる。

7. ラウンドアバウトレターズにおける社会的なデザインの知のはたらき

本章では、直接、互いに面識をもたない三者（祖父／K氏／Y氏）の中心に立って、往復書簡のやり取りをした鈴木（私）が実践した社会的なデザインの知のはたらきについて考察する。RL実践では、まず〈私（鈴木）〉は生活世界を開示して手紙を三者に送付した。そうしてみたら、以前は耳が遠く会話にならなかった祖父との対話が開かれ、物干し竿の箱、草原のバスのように、これまで見えていなかった祖父の生活世界が見えるようになっていった（6.2節）。鈴木は三者との手紙のやりとりを続けるうちに、次第に祖父の生活世界を自分の経験としてイラストを描き、言葉にして語れるようになった。その結果、鈴木は7通目の手紙では中頓別の看板を18時間かけて描いたと言い、その心境を次のように述べている。「下頓別駅跡の看板のイラストは描き終わってみると18時間かかっていたが（中略）、自然と身体で感じたことと心で想ったことの相違が無くなるまで描ききってから出さねばならないという思考が生まれていた。」遠く離れた浜頓別にある事象を二人称的に描くようになった鈴木の変化はRLに関わったK氏、Y氏にも伝播していた。K氏はRL開始当初、他者や場所、出来事など自分以外の事象を描いていたが、次第に「私」の见ている生活世界を開示するようになった（図10）。Y氏は、鈴木の子人であることもありRL開始当初から自己開示の応答があつたが、浜頓別の生活世界を見ようとする視座はなかつた。しかし7通目の中頓別の看板を描いた手紙に対し、「自分も存在感のある人間になりたい」という応答を返し、鈴木の见ている浜頓別の生活世界を二人称的に见れるようになったと考えられる（図13、14）。このように鈴木（私）と四者（あなた）は手紙の往復書簡を通じて、互いの生活世界が浸透していたと考えられる（図15）。本研究における〈浸透する〉とは、「他者の生活世界が浸み渡り、自身の言葉で語れるようになること」と定義する。

図15の循環によって、互いに相手〈あなた〉の生活世界が自分（私）の生活世界の一部となる。浜頓別を舞

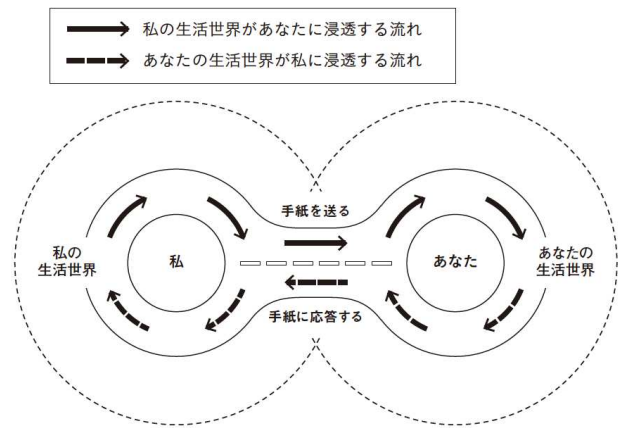


図15 RL実践におけるコミュニケーション往還の概念図

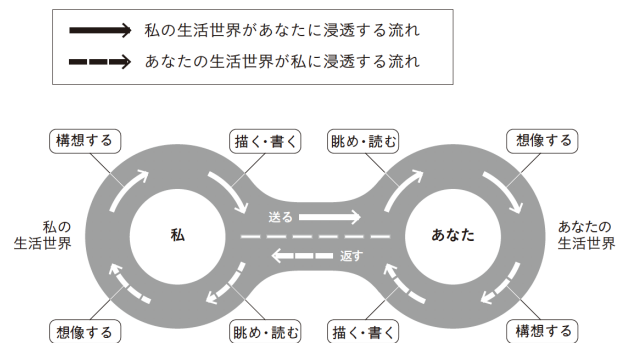


図16 コミュニケーション往還の知のはたらき

台にしたRLでは、祖父、K氏、Y氏のそれぞれの〈見え〉が鈴木（私）の〈見え〉と共に紡ぎ直され、生活世界の再設定が関係者の間で起きていた。

この再設定のやりとりは、図16に示す4つのステップ（構想する→描く・書く→眺め・読む→想像する）でコミュニケーション往還の知がはたらいていたと考えられる。まずステップ1→2（構想する→描く・書く）では、私（鈴木）が生活世界を開示して手紙を送るために、「自分が浜頓別の生活世界で見出した事象をどうやって伝えるのかについて構想して→実際に描く・書く」行為があつた。そこからステップ3→4（眺め・読む→想像する）では、鈴木から手紙を送られた〈あなた（祖父/K/Y）〉が、手紙の「絵を眺め、言葉を読み」、浜頓別の情景を「想像する」行為をしていた。この時間をかけて「眺める」ステップ3があることによって、3人称的に捉えていた手紙の内容を「想像する」、つまり2人称的に捉え直すことにつながっていたと考えられる。三者の応答を見ると、絵と言葉によって生活世界が緻密に描かれている手紙には、より二人称的な応答が返ってきていた。三者から鈴木への応答においても同様の

ステップを踏むことによって、生活世界が相互に浸透するコミュニケーション往還の知がはたらいていた。

このようにしてRL 実践に関わった人びとは、鈴木を中心にして互いの生活世界の再設定を間接的にこなっていたと考えられる(図17)。尚、R氏とは一方向的なやりとりだったためR氏の生活世界が鈴木に浸透することはなかった。例えば、5通目の「放棄されたバス」の手紙では、K氏からの「あのバスはいちご狩りの休憩所だった」という情報をもとにY氏と祖父に手紙を送っている。Y氏は「フルーツ狩りといえはいちご」と返信し、浜頓別のかつての名物を確認。祖父は「バスは宇曽丹の老人クラブの人たちが40年くらい前から15,16年老人クラブの資金集めにいちごを作って休憩室に使っていたもの」という具体的な情報を返信してきた。このやりとりからも、私(鈴木)とあなた(K氏)の往復書簡を通じて私(鈴木)に浸透したあなた(K氏)の生活世界が、別のあなた(Y氏/祖父)にも浸透し、それによって祖父の眠っていた記憶が、目の前の生活世界に紡ぎ直されるということが起きた。この一連のコミュニケーションはまさしく道路のラウンドアバウトのような情報の往還によって生成されていた(図17)。

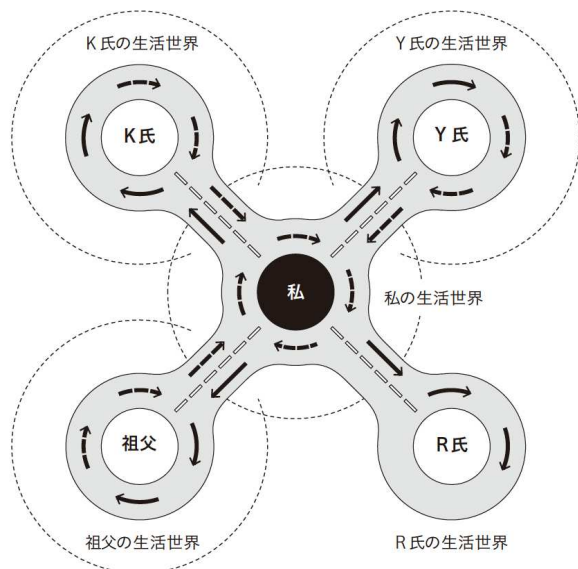


図17 私を介して形成される間接的な生活世界

8. 考察とまとめ

8.1 RL 実践を通じてつくられたもの

本研究のRL 実践を通して実際の現場・浜頓別にかたちづけられた〈もの・こと〉がある。それは、RLの舞台となった浜頓別町に赴いて、鈴木とK氏がRLのやり取りを紙芝居形式で物語るトークセッションイベント

「浜頓別のうちがわ(2021年11月21日(日)13:00~17:00, 浜頓別交流館)」を開催したことである(図19)。トークセッションには計11名の町民が参加した。この場には、鈴木 of 祖父も来場した。来場者は、居酒屋店主や地元の自然保護NPO法人の理事、元町議会議員、交流館のパン屋さんなど、多様な人が参加した。鈴木は、このイベントでのセッションを振り返り「浜頓別にわたしの居場所ができた」と述べた。来場してくれた町の人びととRLのやり取りを共に回想し、それぞれの暮らしに連想を広げた語らいこそ、祖父だけを拠所としない鈴木自身の居場所づくりに繋がったと考えられる。

8.2 ラウンドアバウトレターズの可能性

本研究では、往復書簡「ラウンドアバウトレターズ」を用いて、遠隔地から浜頓別という現場の生活世界を描き出し、人びとの繋がりをかたちづくることができた。この実践を通して、鈴木がこれまで何気なく居心地の良い場所として捉えていた浜頓別の記憶は、鈴木自身をはじめとして祖父や手紙に関わったK氏、Y氏、R氏の三者に紡ぎ直され、さらにトークセッションでは町民、鈴木の両親をも巻き込み、まちに関わるさまざまな人が自身の言葉で自分の〈見え〉を語り、咀嚼して味わいあう対話が生まれていた。RLで視覚化された手紙を囲みながら、地域の記憶を各々が自分の言葉で語り、味わう。そうした経験をもつ人が増えていくことで、いずれまちを離れてしまう人が現れ、結果的にまち自体が消滅してしまったとしても、人びとの間で地域の記憶としてまちの存在が語り継がれ、まちに思いを馳せ、さまざまな人の中で「忘れられることのないまち」としてあり続けていくと考える。

文献

[1] 北海道新聞どうしん電子版(2020)。「③札幌への集中続く前提で数十年単位で対策を」

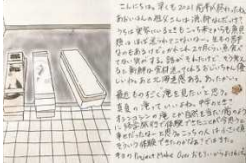
<https://www.hokkaido-np.co.jp/sp/article/466577>

[2] 宮田穰(2019)。「ネット時代の手紙学」北樹出版。

[3] 横溝賢(2020)。「ランプリングデザイン運動のすすめ: 青森県浪岡地区におけるご当地包装紙のデザインプロジェクトを事例として」日本デザイン学会誌 デザイン学研究特集号102号。

[4] 佐伯胖、刑部育子、荻宿俊文(2018)。「ビデオによるリフレクション入門: 実践の多義創発性を拓く」東京大学出版会。

付録 A 表：鈴木と三者（K 氏、Y 氏、祖父）との往復書簡の記録内容

	鈴木	町民 K	友人 Y	祖父
1 通目	4/23(K 氏宛)・4/26  ・長い棒にかごを下げて魚を干していた ・最初見たときは「何だこれ」ってなった ・青いかごの中身も見たい ・家にあるもので工夫するの祖父らしい ・神奈川では高いところで魚を干す光景はなさそう ・風の力を使っているっぽい ・家の外などで作ったり活動していることはあるか	4/30  ・木を伐るチカラ君 × 伐られた北見(私)対談 ・魚を干しているのは都会でもたまに見かける ・なぜわざわざ屋根の上にまで伸ばしているのか ・外の活動一庭の木を伐ってもら ・畑に日当たりが良くなるように木を倒したい ・木を伐ることは滅多にできない ・すごく高いところまで登って枝を落とす ・伐ったら薪になる ・手間暇かけたほうがいい ・子どもの頃から木登りが好き ・昔から木に慣れ親しんでいた ・木を伐ることが楽しい ・木を伐るのは生活のための一仕事 ・こっちの人たちが外でやっていることは生きるために必要だからやっていること	5/26  ・神奈川で見たことないけど海沿いにありそう ・なぜ高所で魚を干すのか ・なぜ細い棒で立てかけているのか ・強風で倒れそう	5/8  ・使っている竿は冬に車庫の屋根の雪を降ろすためのもの ・かごは祖父が釣ってきた魚(主にカレイ)を干す道具 ・下頓で泊まったときギョウジャンニクたくさん食べて美味しかった ・11 日からまた下頓へ行く予定 ・そのときは山菜を送るからと母に言うように
2 通目	5/25(K 氏宛) ・6/18  ・「生きるために必要だからやっている」→うちなら祖父が釣った鮭を発送する様子 ・うちでは鮭が送られてくるのは普通 ・初めて発送の様子を見た ・長い段ボールは新鮮 ・魚を釣ってはうちや親戚に送る祖父、いつも食べてるわけじゃないけど「生かされてる」感覚 ・Kさんは海より山に近いところに住んでいる？ ・チカラさんともぜひ関わってみたい ・カレイもよく送ってくれるけどどこで釣ってるのか ・車庫に立てかけて強風で倒れたりしないのか ・高いところで干してるのは理由があるのか ・親戚とかから魚送られたりしたか	6/2  ・うちのすぐ裏は山 ・地図の濃い緑部分は山 ・海で鮭釣ってる人たくさんいる ・近所に配ったり ・魚を入れる箱はホームセンターに売っている ・夏：下頓は半袖、はまとはんは長袖 ・下頓が雪でもなかつたは大雪 ・冬：はまとはんに雪がなくても下頓は雪 ・たかが約 10km ですごく違う ・浜頓別は鮭	7/7  ・実家でも神奈川来てからも魚介類ほぼ送られて来ない ・2 ヶ月くらい魚食べてない気がする ・生もの苦手 ・最近ものすごく滝を見た ・真夏の滝っていいよね ・オシコシンの滝とか自然を当たり前に中学の修学旅行で体験できたことが今思うと幸せだった ・新鮮な食材送ってくれる祖父優しい、あったかい ・北海道感ある ・祖父は漁師だっけ？ ・はまとはん人は小さい頃そういう体験できたのかな	6/26  ・カレイは舟に乗って釣りに行く ・高いところに干すのは風通しが良くなるのとハエが来ないため ・雪おろしの竿は風で倒れないように工夫して立てている ・普通は朝 4:30 から 11 時まで、ここ 2,3 年は無理ができないので日曜午後 1 時から 4 時までの 3 時間乗っていた ・昨年は(釣り)できなくなった、船頭が釣ったものを送ってもらっていた
3 通目	6/30 	7/6 	7/16 	8/30 

— 300 —

6 通 目	9/20 (K 氏宛)・ 9/28・10/28 (祖父宛) 	9/24 	10/3 	11/10 
	・釣りの準備をする祖父の様子 ・後輩の研究で昆布漁師さんの手の話 ・祖父の手も「長年釣りをする人の手」(職人の手的な) ・手にはその人の人生が表れるのかでは ・K さんの手も薪を伐り続けていたら「薪を伐る人の手」になっているのかも？ ・チカラさんはすでにそうかも？ ・職人の手、カッコいい ・これから釣人続けてほしい ・祖父が遊びに行っていたときはどんな感じだったのか	・もしこの手紙のやりとりがなかったら、生活の中で決して手形は取らなかっただろう	・祖父とともにかっこいい特徴捉えている(描いた絵に対して) ・イラストの中ではペンチが好き、かわい	・今日これから来年の鮭釣りの道具を作ろうかと思っている ・いちご畑に関わっていた人は現在祖父と同じ年のIさんというおばあさんとあと2人くらいしか生きていない ・今年は今の状態ならお正月に(筆者宅に)行く予定
7 通 目	10/28(※祖父のみ送付なし) 	11/4 	11/20 	送付がないため返信もなし
	・下頓別駅跡(の看板) ・「しもとんべつ」の文字が人の手で塗り直されている→これも職人技なのでは ・誰かが塗り直している「しもとんべつ」を手紙を通して自分もなぞっている＝不思議な感覚 ・塗り直した看板を大事に思ってくれる人がいることが素敵 ・マニアの中では聖地？でもあったりするらしい	・下頓別駅の手入れは高齢の町民が一人でやっていて、将来手入れする人はいなくなるかも ・隣の銭湯は先月潰れたけど有志のボランティアですぐ再開、儲けはなし ・ライフラインにも影響が出ている「過疎」の地に都会にはない暮らしを求めて移住した自分からしたら人が少ないのは魅力 ・過疎のいいところたくさんある ・東京では滅多に会わなかったけど近所に友達がたくさん、毎日友達に会う、親世代とも友達 ・すぐ裏の山には熊が食べた鹿の骨が落ちている、いつでも動物園気分 ・吹雪が酷いと町全域が停電に、蠟燭の灯りでご飯は逆に新鮮 ・空気が綺麗なせいか鼻毛が飛び出なくなった ・東京では不動産購入は諦めていたが、空き家がタダで庭付き一戸建て、家庭菜園ができるくらい庭が広い ・お店が遠いのでトイレトペーパーをストックするようになりあ、ない！がなくなった ・朝は日の出と共に起床、日没と共に真っ暗に ・東京ではまだ働いていたが 22 時ごろには就寝 ・犬の散歩はノーリード、猫は放し飼いで散歩についてくる ・犬も猫も飼い主も幸せ	・何もない場所にボツと、でも堂々と立っているのがカッコいい ・こだわりが見えて、「人の手で作られている」あたりが感じが感じられる素敵な看板だね ・自分も存在感のある人間になりたいと思う ・今はなんでもデジタルや機械で作れるからこそ、アナログな手法が、良さが際立つように見える ・なんかいつもとハガキの質違う、これも何か理由があるのか ・葵さんはどう思う？	